

# 緩やかな曲線によるオープン診療空間

逗子駅前 鈴木眼科

神奈川県・逗子市

設計／マリオ デル マーレ 下平万里夫  
吉野智恵美  
施工／丹青社  
撮影／ナカサ&パートナーズ

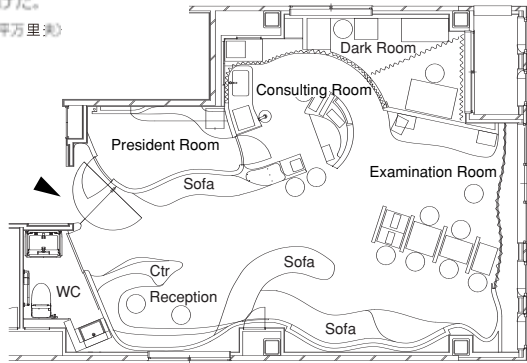
1. 受付前より診療エリア全体を見通す。待合、診察室などすべてがオープンな空間。待合のソファは座面の高さにバリエーションを持たせている
2. 受付。天板も内壁同様、曲線を描く。壁に連なる曲線の板は棚板として使用

1. A view of the treatment area from the desk
2. A view of the desk



コミュニケーションをデザインする  
医療訴訟が続発する背景として、医師とスタッフ、患者と医療関係者の間で、コミュニケーションが取れていないことが大きいように思う。そこで、今回の眼科医院の設計にあたり、コミュニケーションをいかに活性化するかを最大のテーマと考え、まず初めに、今日の医院が抱える問題点をコミュニケーションという視点から見直した。  
その結果、患者サイドからは無味乾燥な待合室で何のインフォメーションも与えられず、長時間放置され、退屈であると同時に次に来る診療や検査の内容と流れが見えない不安な状態に置かれていることが問題点として浮上してきた。また、ドクターサイドからは待合室に何人の患者がいるのかわからず、診察室から看護師や受付事務員の動きが見えないので、医院の責任者として不安があることがわかった。むき出しの検査機器と無骨な医療用の家具に囲まれた空間は、患者の不安感をあおるばかりでなく、そこで働く医療側の人間にとっても決して快適な空間ではないと思われた。私達は、そうした問題点について繰り返しブレインストーミングを行い、最終的に「心地良い空気に包まれたオープンクリニック」というソリューションに到達した。ここで言うオープンクリニックとは文字通り、待合室、検査室、診察室という区切りをなくし、医院全体を大きな待合空間に見立て、その中心にドクターが座り、ドクターの診療行為および、看護師による各種検査そのものをオープンにした新しい医院の形態である。  
オープンにすることで待合室や診療室の狭さが解消され、広々とした待合スペースを実現でき、患者にとってはドクターの診療や看護師の説明を目の当たりに見聞きすることで、退屈な待ち時間が眼の健康に関するレクチャーの時間になる。また、診療や検査の流れが見えることは、患者の不安やイライラの解消に役立つと考えた。  
もう一つのテーマである「心地よい空気に包まれた空間」を実現するために、病院を連想させる冷たく無機質なマテリアルを避け、レザーやベージュのタイルカーペットなど温かく優しいイメージのマテリアルで統一した。  
また、患者に恐怖感を抱かせるようなビカビカした検査機器や先端の尖った医療道具はできるだけ人目につかないよう、スライスした丸太の陰や特製のドクターデスクの見えないところに注意深く隠し、診察券やロゴマークなどもトータルにデザインし、統一感のある心地よさを作り上げた。

(下平万里夫)



Eye Clinic Zushi Ekimae SUZUKI GANKA Plan 1: 200